博士学位論文審査の要旨

【学位論文審査の要旨】

本論文はアクション・リサーチの手法を用いて、首都圏にある大学病院の小児病棟において子どものEnd-of-Life Careにかかわる看護師たちが、語ることを通して変化していく様を描いた質的記述的研究である。

医療の進歩により子どもの救命率も上昇しているが、それでも尚亡くなる幼い生命があり、そうした子どものEnd-of-Life Careにかかわる看護師たちは、自らの実践について無力感や後悔の念に駆られ、不全感を抱いている。申請者は、このような看護師たちとともに「語ろう会」と名付けられた集まりを始めた。

会の開催当初、End-of-Life Care に対してネガティブな捉え方をしていた参加者たちは、会の中で自分の正直な感情を吐き出し、様々な思いを共有することで、自らの過去の実践を振り返り、再評価することとなった。それはまた同時に、語ることの大切さや語り合う場の必要性の認識につながり、回を重ねるごとに「語ろう会」は、年齢や経験年数を問わず、自由に語ることができる場となっていった。その中で、参加者たちの悩みは受け入れられ、ともに考えることで新たな気づきがあり、そこからまた新たな具体的ケアが生み出され、実践されるという変化の流れができ始めた。また、そうした実践の変化は、「語ろう会」に参加していない他のスタッフの意識や実践にも波及していった。

以上のように、申請者が現場の看護師たちとともに始めた「語ろう会」というアクションから看護師たちの様々な変化が派生した。その変化は看護師たちの End-of-Life Care に対する意識や捉え方だけでなく、実践そのものの変化にもつながるポジティブでダイナミックな場の変化でもあった。

申請者がこれまでの研究方法における研究者（研究する者）と研究参加者（研究の対象とされる者）という関係性とは全く異なる、ともに研究の主体となって現場の状況を変え、その変化のプロセスを記述した研究はオリジナリティの高いものと評価されると同時に、同様の課題を抱える実践現場に多くの示唆を与えるものであると言える。

審査における主な質疑は、アクション・リサーチを用いた理由、参加者への研究についての説明方法、看護師の意識や実践の変化の分析方法、「語ろう会」が病棟の看護師に大きな変化をもたらした理由、「語ろう会」の運営の仕方やルール等についてであった。また、「語ろう会」が「自由な場」となっていったプロセスや「自由」の意味についても議論がなされた。

これらの指摘や質問に対して、研究の中で得られたエピソード等を交え、具体的で、適切な回答や発言がなされた。また、長年実践家として子どもと家族の看護に携わってきた申請者の、小児看護の実践現場をより良いものにしたいという熱く、真摯な研究態度が示された。さらに、審査の中で明らかになった今後の課題を確認し、本研究に続く新たな研究に取り組んでいくという意欲が示された。

以上のことから、本研究が博士学位論文としてふさわしい水準にあると認め、申請者

博士学位論文審査の要旨

が博士（看護学）の学位に相当するものと判断した。